一般応募

Smith-Magenis 症候群３例の概日リズム障害に対する様々な投薬効果について

岩越美恵

【諸言】Smith-Magenis 症候群（SMS）は、染色体 17p11.2 上の遺伝子 RAI1 を含む欠失による MR を伴う多奇形症候群である。 本症は Melatonin の昼夜逆転分泌による概日リズム障害と急激なかんしゃくは、保護者にとって深刻な育児困難をもたらしている。これに対し、欧米では夜の合成 Melatonin,朝のβ-blocker 投与による治療が奏功しているが、 本邦での報告は見られない。今回 SMS3 例に対し、 前記薬剤を含む様々な治療を行ったので報告する。【症例 1】19 歳女子.3 年前、朝のβ-blocker を投与し、日中睡眠発作とパニックの回数が減少し、現在も継続している。【症例 2】9 歳男児. 1 歳から 4 歳までは、成長に伴い中途覚醒が減少し、 日中睡眠発作の減少を認めた。 3 歳～8 歳時に夜間早期覚醒時に Melatonin を使用。 6 歳～8 歳時に朝のβ-blocker を追加したが効果少なく、現在は中途覚醒時興奮と日中パニックの抑制目的で夜リスペリドンのみを服用しているが。睡眠リズムはほぼ正常である。【症例 3】5 歳男児. 夜に Melatonin を 0.5mg から開始し次に 1mg に増量したが効果ないため、早朝覚醒に対して Melatonin の徐放錠に変更して、若干効果が得られた。【結論】今回の症例の中には、 乳児期～幼児期にかけて自然にリズムの改善が認められたものがあった。日中の入眠に対する治療として、β-blocker の有効なものとそうでないものが見られた。また夜間の睡眠障害（中途・早朝覚醒）に対する治療に関しては、Melatonin の徐放剤の方がより有効と思われた。

一般応募

「母性看護学における看護の役割」～母性看護学と助産学の教科書を比較して

小坂素子
武ユカリ、金川治美

【はじめに】母性看護学とは、次世代の健全な育成と女性の生涯を通じた健康を支援する看護学である。本学での教育活動を通して、看護基礎教育における母性看護学のあり方を検討する必要があると考えた。【目的】母性看護学と助産学の教科書を比較し、学習内容の違いを明らかにした上で、「母性看護学における看護の役割」と照らし教授すべき内容を検討する。【方法】看護師国家試験の出題基準中項目の「分娩生理と産婦の看護」「分娩の異常と看護」について、Ａ社の「母性看護学各論」とＡ社の「助産診断・技術学Ⅱ」の教科書の内容を比較した。【結果】(1)「分娩生理と産婦の看護」の該当項目数は 30 項目、(2)「分娩の異常と看護」の該当項目数は 27 項目になった。①認知、②情意、③精神、運動は、母性看護学各論で(1)①30、②21、③23、助産診断・技術Ⅱで(1)①29、②23、③25 だった。母性看護学各論で(2)①27、②13、③14、助産診断・技術Ⅱで(2)①19、②4、③9 だった。【考察】母性看護学では分娩期において幅広い内容を教授している現状がある。母性看護学における教授範囲が女性の全ライフサイクルに関わる内容であることを考えると、必要な教授内容の精選をすることが重要であると考える。【課題】今回は 1 社の教科書の内容比較であった。更に母性看護学を教授する側の授業構築について調査し、看護基礎教育における母性看護学の教授内容の在り方を検討したい。